

郎との間に、いわゆる「絵画の約束」論争が起こっていた。柳宗悦が『白樺』に発表した「革命の画家」(1912)も、武者小路への援護射撃らしい。そこでの話題は、ロンドンにグラフトン画廊で催され議論を呼んだ「フランス後期印象派展」(1910)だった。『国華』雑録に言う「二十世紀の初頭に仏蘭西に起つた後期印象派なその影響を蒙つた若い画家」云々も、この件への揶揄だろう。これら「若い画家」の「画家としての自覚」は認めるものの、作品は「古人の名画」や「完成したる藝術品」からはほど遠い、「無意味な塗抹」で「頗る稚拙を極めたもの」との酷評である。美術院一派にも昨今の若い画家たちにも欠けるのは「技巧の価値」だ、とこの匿名子は説く。愚かな「革命」のせいで、「日本画は滅びた。同時に洋画も滅びた」。

1913年当時、『国華』の主幹は、瀧精一。1900年以来死去の年1945年までその重責を担う。そして翌年の1914年には、瀧は東京帝国大学に新設された美術史学講座の初代教授にも就任する。『国華』の編集を天心から引き継ぎながら、天心の提唱した「日本画改造」の運動を否定する瀧。その彼はまた、『国華』主幹として、もっぱら古美術研究に機軸を据える。この象徴的な父殺しが、日本の学会アカデミズムにおける美術史研究の、今日に至る一原型を方向づけた。

連載  
⑧  
岡倉天心没後の「父親殺し」

## 日本近代美術研究における一九一三年

稲賀繁美  
Inaga Shigeami

国際日本文化研究センター研究員・  
総合研究大学院大学助教授

『国華』という雑誌がある。1989年には1149号までの索引が発行された。この国の美術研究の権威ある専門誌だ。創刊は1889年、創設者は岡倉天心。といえ、美術研究の黎明時代も彷彿としよう。その天心は1913(大正2)年に没するが、なぜか『国華』には追悼記事は掲載されない。それどころか天心死去翌月の281号雑録には、天心の名には直接触れず、彼が育成した日本「美術院一派の人々が過去に行つた運動」を名指して批判する、奇怪なる匿名記事が掲載される。「この派によつて試みられた新運動は、可なり広大な波動を起こしたものであつたが、世間からは朦朧体といふ嘲笑的名称を以て迎へられた。その失敗の迹は明白である。」「日本画を洋画に近けやう」とした各で暗に槍玉にあがっているのは横山大観や(故)菱田春草だ。「彼等は画面から線を取り去ることを知つて、而かも自然の物象に存在する線の節奏[リズム]と強調[アクセント]とを忘れて居た」。これでは「惨しい戦敗は当然である」。

謹厳冷徹な美術作品研究を旨とする雑誌には、いかにも場違いな物言いとも見える。その枕には、「日本画界にも最近一二年に深い革命的思想が吐息をついて現はれ」とある。前年には山崎信徳の《停車場の朝》という作品を巡って、『白樺』誌上で、武者小路実篤ら山崎擁護派と、木下空太